

地域ブランド 戦略 50

地方PR機構 代表理事
殿村 美樹

大原美術館がフレイル予防で地域貢献

少子高齢化が止まらない。全国の高齢化率が約3割に達する「2025年問題」を目前に、昨年の出生者数が80万人を切った。まさに「静かなる有事」だ。

そんな中、名画の殿堂で知られる岡山県倉敷市の「大原美術館」が、地元の高齢化に貢献しようと日本初の「美術館でフレイル予防プログラム」を発表した。フレイルとは高齢になるとともに心身が弱っていく状態を表す言葉で、この時期に適切な運動や食事、社会参加などの対策を施すと健康寿命が延びるといふ。つまり、今のうちにフレイル予防の仕組みを地域に導入すれば、介護需要の増加による医療崩壊を抑制することができるのだ。

しかし多くの自治体は、コロナ対策に追われて地域包括ケアシステム（地域全体で高齢者を支える仕組み）の構築もままならない状態である。民間主導でフレイル予防に取り組む仕組みができれば自治体はもちろん、地域も救われるだろう。

大原美術館のように地域を代表する文化施設がリードすると影響力も大きい。同館は倉敷紡績（現クラボウ）などを創業した実業家・大原孫三郎氏が創設

した美術館で、エル・グレコ「受胎告知」やモネの「睡蓮」など世界の名画を数多く収蔵している。世界的な知名度も高く、これまで国内外から多くの観光客を呼びこんで倉敷の地域経済を支えてきた。



名画の前で行われた大原美術館フレイル予防サポーター研修の修了式。バスガイドも参加した

今回のプロジェクトをリードした学芸統括の柳沢秀行さんは「地域貢献はミッション」と言い切る。「観光客が途絶えたコロナ禍には、地元の人たちがみずから寄付して当館を支えてくれました。今度は私たちが、地元の高齢化に貢献します」と地域連携の重要性を強調する。ちなみに現在、倉敷市の高齢化率はすでに約3割に達している。

それだけにプロジェクトの内容は熟慮されている。まずは専門知識の習得を重視し、同館の学芸員や接客スタッフら7名が、地域医療振興協会が開発した「フレイル予防サポーター養成研修（オンライン学習とワーク

ショップで構成／約70時間）」を受講、3月中旬には全員が研修を修了した。さらに講義最終日には、習得した知識をすぐに実行に生かせるよう、具体的なアクションプランの発表が行われた。いずれも実用性の高いプランばかりである。

フレイル予防ツアー検討

たとえば広報担当の門利博子さんは、地域の中核病院「倉敷中央病院」と連携し「医療×アート」をテーマにしたプランを発表。医療を絡めることで地域全体を巻き込む実用性を説いた。また柳沢さんは、地元だけでなく観光客も巻き込もうと倉敷美観地区全体を舞台にしたツアープランを作成した。兵庫県の神姫バスグループと連携し、近々「フレイル予防ツアー」を売り出す計画を進めている。しかも同社のバスガイドは2年前に同じ研修を修了しており、同社主催のフレイル予防ツアーには1000人以上の動員実績がある。今回はそのノウハウを生かしてバスの中から健康寿命を伸ばす、画期的なアートツアーをつくる予定だ。

地域医療振興協会の中村正和医師は「地域包括ケアシステムには今後、民間による『商助』の取り組みが必要です。またアートは鑑賞するだけでもフレイル予防になります。倉敷から全国へ、良い手本を見せてほしい」と期待を寄せる。今後の展開に注目したい。 **G**